

衣生活

あれこれ (18)



今村律子

和歌山大学教育学部教授。被服生理学、被服・衣生活教育が専門。博士(医学)を愛知医科大学において取得。日本家政学会、日本衣履学会などに所属し、『衣履と健康の科学』などの著書や衣履の蓄心地に関する論文がある。

日中は25度近くまで環境温度が上がる日もあります。が、朝夕はめっきり寒くなりました。夏に引き続き、冬季の暖房についても節電要請がされていますので、室内の暖房に頼る前に暖かく衣服を着用することがますます大切となっています。

暖かく衣服を着るといふ点では、数年前から市販されるようになった発熱効果をつたう機能性肌着が豊富に出回っています。もともと繊維には、湿気を吸収すると発熱するという性質が備わっています。湿気を吸う量(吸湿性)が異なるため、その発熱量はまちまちです。スポーツ用品メーカーが、吸湿発熱に富む化学繊維(指定外繊維:ブレスサーモ)を利用し、10年以上前から呼吸する繊維

発熱肌着と毛…どっちがいい？

熱は、着用している間ずっと継続しているというわけではありません。天然繊維の毛ウールは、吸湿発熱量が多いだけでな

く、繊維がもともと波状に縮れており、繊維と繊維の間に多くの静止空気を含むため、保温性が高く、冬の衣服として適しています。毛は湿気を吸いますが、繊維内部にその湿気を閉じ込めるため、綿のように湿って身体を冷却させることもありません。冬山登山には

いるのではなく、おしゃべり着洗いの中性洗剤を使って、手洗いをするか、洗濯機のドライマーク用洗濯をする必要があり、少々面倒くさいかもしれません。毛の繊維は、私たちの髪の毛と性質が同じです。髪の毛を洗った後に、髪の水

シゴシすると髪の毛が痛むので注意したほうがよいのと同じように、天然繊維である毛は、湿った状態の時に摩擦などの力加わると、いわゆるフェルト化してしまい、風合いが変化してしまします。肌着のように洗濯頻度

昔から着用されている肌着の繊維が毛なのです。しかし、動物性繊維は、洗濯の際に日常の洗濯物と同じ弱アルカリ性の合成洗剤を用

数年前にニュージールランドへ旅行した時、手入れ等の取り扱いが非常に楽になった改質ウールの肌着が販売されているのを免税店で見かけました。さすが、人口よりも羊の数が多くといわれるニュージールランド

かと思いました。わたしは、かなり長い間その売り場を離れることができません、その商品を買おうかどうかどうしようかと迷っていたことを思い出します。